

虚ろな目をして憔悴しきったピッピーが、家から出ずに泣いているのが見える。社会や大人たちはピッピーの行動に粘り強くダメ出しし、彼らが「正しい」と信じる型にはめるべく矯正し続けた。今やあのピッピーが、「気を付け！ 礼！ 前へ倣え！」という敬礼までできるようになり、周囲は「まともになった」「やっと成長した」と喜んだ。でもピッピーはもはや、かつてのピッピーではなかった……。

私もピッピーだった。子どもは皆ピッピーだ。自由で楽しくて、ビビビバババで大笑いできる逆立ち歩きのピッピー。けれど「ダメの壁」は至る所にあり、「普通」という枠からはみ出た「魂の棘」や「夢見る翼」、「無邪気な悪」といった個性の芽は削ぎ落とされ、画一的な「優等生」へと変えられてしまう。学校という箱に入れば、皆、同じ形の「人型ロボット」へと仕立てられてしまう。

そんな生きづらさを感じるのは私だけじゃなく、クラスメートも、ひとり、またひとりと姿を消していった。彼らがいなくても、まるで最初から存在しなかったかのように、日常は進んでいく。空席の机に積もるプリントを、先生が「もう配らなくていい」と言ったとき、私は言葉を失った。何もできない自分が、彼らを置いてけぼりにする大人たちの「共犯者」になったのだと、その無力感に打ちのめされていた。せめて、「学校に来なくても、あなたはずっとクラスメートだよ」と伝えられたらよかったのに。ニュースで「引きこもり」の話題に触れるたび、彼らが憔悴した「現代のピッピー」に思え、苦しくなる。彼らはきっと、「家に留まる」という選択で自分を守り、個性を失わないための最後の抵抗をしているのだ。

ピッピーが「学校にはもう行かない」と決めたように、学びの場は学校だけじゃない。しかし、「不登校」という言葉は、非があるかのように突き放すだけで、他の選択肢を尊重しようとはせず、希望の道も示さない。誰かが決めた「正常」から外れた人間は、その診断書を抛り所のように握りしめ、「正しくない」理由はその病名にあると言い聞かせる。だが、そもそも「正常」とは何なのか？ 誰が何の基準で決め、その価値を測るのか？ 「本人の幸せ」は一体どこに？

私と彼らとの違いは、「自分」を守ったか、「普通」のために差し出したか……なのかもしれない。本当は私だって、ピッピーに負けないうくらいハチャメチャだったのに！ 同調圧力に屈せず、「NO」と言える強さを持ち、自分のためだけでなく、他者のために戦う「世界一強い女の子」は私たちだ、といえる自分でありたい。「常識になんか囚われるな！ 自分の道を行け！ つまらない人間になるな！」——ピッピーの声が耳元で響く。そして、木の上にひょいと登り、私たちを見下ろしながら、こう続けるのだ。

「さあ、グズグズしてるのはおしまいよ！ 自分の好きなように生きなきゃ。じゃなきゃ、人生なんて退屈すぎて、あくびが出ちゃうわ！ ほら、こっちへおいで。だって、あなたが生きてるだけで、世界はもっと面白くなるんだから！」